

博物館 アラカルト 30

福山藩士，黒船に潜入

博物館ニュース第77号（平成20年8月発行）で、次の記事を掲載したことがあります。

石川和助・江木繁太郎、^{あめりか}垂米利加^{つしまのかみ}応接御掛^{けし}り井戸対馬守様家士となりて、嘉永七年甲寅二月廿八日、神奈川横浜にて^{いせん}夷船^{きょうおう}に乗り^{きょうおう}饗応^{きょうおう}にあい、夷人の内に羅森と云う清朝人居合せ、繁太郎と筆談したる写し也。和助は先^{さきだ}って帰^きりたる由

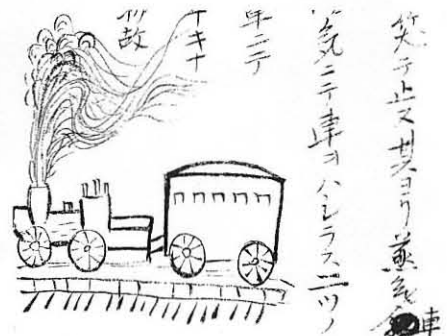
「福山藩儒学者の石川和助（^{せきとうとういん}関藤藤陰）と江木繁太郎（^{がくすい}鰐水）が、幕府役人の家臣という名目で、横浜に停泊中のポーハタン号で行われた饗応に出席したという記録です。彼らの主君である老中・阿部正弘の命令がなければ、このようなことはできません。おそらく、黒船の内部の様子を調べるのが目的だったのでしょう。石川和助（通常は石川和介と表記）は正弘の腹心で、前年にも浦賀に来航したペリー艦隊の動向を視察し正弘に報告した人物です。

一方の江木繁太郎は、ペリー艦隊に同行していた清国人・羅新（羅森）と筆談をして、中国の情勢を質問しており、この文の続きは二人の筆談が記されています。『ペリー提督日本遠征記』に収められた羅新の手記には、多くの日本人に筆談や揮毫^{きごう}を求められたと記されています。その中に福山藩士もいたこととなります。

昨年2月、当館所蔵の窪田家文書（明治期に地域の医療や社会事業に尽力した福山の医師・窪田次郎の資料）を調査していた北広島町の杉本武信氏が同文書の中から嘉永7年(1854、安政に改元)に来航したペリー艦隊に関する見聞録を発見しました。当館で内容を解読したところ、平成20年に発表した資料と同じ出来事が、次のような図を含めてより具体的に記されていることがわかりました。

今回発見した資料は「^{きつづり}雑綴」と記され、各種の文書と一括して綴られていました。その内容は次のとおりです。

- ①嘉永7年2月、この資料の筆者と用人、石川和介の三人が江戸町奉行で^{きよと}応接掛^{きよと}を務めていた井戸対馬守の家臣として神奈川から幕府の御座舟・天神丸で横浜に向い、日米代表が幕府贈り物を交換する様子を見学する。筆者はペリーの^{きよと}挙措^{きよと}や陸戦隊の調練を注意深く観察する。
- ②翌日、一行はペリー艦隊の旗艦に乗船、アメリカ主催の饗宴に出席する。筆者は黒船の艦載砲を観察、出された酒を「^{ふんそう}鞆の梅酒」のようだと感じ、黒人に扮装した水兵のダンスを「^{つたな}拙シ」と評する。



- ③翌日、石川和介は先に帰ったが、筆者は再度陸戦隊の調練を見学しようと横浜に留まる。この日は陸戦隊は上陸せず残念がるが、ペリー艦隊に随行していた清国人・羅森を見つける。一筆を求めて日本人が集まる中、隙を見て羅森と筆談を交わす。

以上のことから、今回発見した資料は江木鰐水の記録の写しであり、知人の^{さかたにろうろ}阪谷朗廬^{さかたにろうろ}に手紙の追伸として送られたものと思われます。この資料が窪田家文書の中にあっただのは、窪田次郎が阪谷朗廬に儒学を学んでいたためだと思われます。

この資料は平成20年発表の資料の信憑性をさらに裏付けると同時に、ペリー艦隊が当時の武士の目にどのように映ったかをうかがい知ることができる貴重な資料です。

（主任学芸員 西村直城）

このページで紹介した資料は、8月2日(金)～9月26日(木)に当館のスポット展示「福山藩士，黒船に潜入」で展示します。